

スクールカウンセリングのスーパービジョン

原 裕視

(目白大学大学院心理学研究科)

1. はじめに

筆者のスクールカウンセリング活動は、コミュニティ心理学的アプローチに基づいている。したがってスーパービジョンでも、その立場から行うことが多い。とは言ってもはっきりと自信のある方針を持ってやっているわけでもない。さる高名な方が「皆スーパービジョンをやりたがるけれど、そう簡単には出来るモンじゃない、、、」とおっしゃっているのを聞いたことが有るが、確かにそうだなと感じている。しかし、やりたがっていなくても引き受けねばならない以上、引き受けているということである。そこで、今回はスーパービジョンに関する理論的、体系的な議論ではなく私の場合を事例的な位置づけで紹介させていただく。私がスクールカウンセリング活動に対する「指導」をする時のスタンスは、「コンサルティー中心のコンサルテーション」を「同業者」として行うというイメージに近いが、コンサルテーションで無くスーパービジョンである以上、ユーザーとスーパーバイザー(SVee)に対する責任はこちらにある。そういう関わり方をする以上、当然大きな方針は持っている。極めて大雑把に言えば、それは「相手の、当事者のニーズを本当に確かめることがすべての原点」「心理的援助活動の質をCure-Care-Support-Empowermentという広いパースペクティブで考える」「援助の目的や望ましい状態を必ず設定する」「みんなで“よってたかって”可能な貢献をすることにより、ともかく具体的な成果を得る」とでもいうものである。

2. スーパービジョンで伝えたい、コミュニティ心理学的アプローチのエッセンス

スーパーバイザー(SVer)としては、SVeeに伝えたいことは多少あり、その内容は個人臨床の心理査定や面接技術の指導とはまた異なるものが多い。つまり、習得した個人心理臨床の知識や技術をコミュニティ(地域社会)の中でどう生かすかということ(このことをコミュニティアプローチと言う人もいるようであるが)に関する指導ではない。もちろんそのことも伝えたいことの一部ではあるが。より伝えたいことは、コミュニティ心理学が大切にしていること(価値観)、コミュニティ心理学の発想、目的であり、これにふさわしい研究や介入の方法であり、さらにそのための具体的な介入の技法、そしてこれを実践としてどう展開するかなどの応用技である。この中でも、コミュニティ心理学のエッセンスは発想、目的、大切にしている価値に有ると考えている。従ってこのこと、コミュニティ心理学的考え方とそれに基づく心理臨床活動、心理的援助活動とはどういうことかを理解し、修得することに指導の重点が置かれる。とりわけ初心者に対しては、ひたすらこの考え方の「思考」と「感

受性」の「訓練」を行うことになる。

3. どちらかと言えば初心者に対してのスーパービジョン時にチェックするポイント

それでは大切にしている考え方（発想、理念、価値、目的、目標など）とはさらに具体的にはどのようなことか。SVeeの活動を語ってもらいながら、また質問を受けながら以下のようなポイントを確認し、話し合っている。

① 密室での臨床行為から生活場面での活動へと考え方を大きく転換出来ているかどうかをチェックされる。学校での活動は相談室があってもそこだけで完結する活動ではない。相談室、カウンセラー室、カウンセリングルームも病院や教育研究所の相談室とは異なる。学校は子どもにとっても教職員にとっても1日の多くの部分をそこで過ごす場である。現実の問題の多くが生じる場であり、そこで働きかけ、問題解決を図る場でもある生活の場に、すなわち相手の土俵に飛び込んで、相手の生活を大きく乱すことなくそこでふさわしいサービスが提供できるかどうかである。まず自分が働く場をそのように、了解できるかどうかを確認し、その方向に促していくことになる。

② 従ってそこで行われる活動は、治療的関わりよりも予防を重視する側面が大きくなってくる。そもそも生活の場においてインテンシブな、あるいは長期的な治療的関係を持つことは難しい。生活の場では病理を治すことよりも、みんなとの生活から切り離さずに、その中でサポートしていくことが重要である。従って病的な子を相談室に受け入れて、「治療する」ことは学校内での活動の中心にすべきではない。むしろ特定の問題を抱えた子だけにサービスを提供しようとするのではなく、すべての子に対して心理的援助サービスを提供する方に力を入れるべきである。それにふさわしい活動になっているかをSVの課程で吟味しなくてはならない。すべての子を対象にする活動は当然、病理に対しては後追いの治療ではなく予防的であり、発達援助的、開発的なものになるはずである。それはまた個人だけを対象にしたものではなく、グループ、学級、学年、全校というように学校というコミュニティを構成している人すべてに対するサービスの提供ということになる。そのような発想が出来るかどうか、まずはその認識が可能かどうかをチェックすることになる。

③ コミュニティ心理学ではそもそも人を孤立した分子的な存在とは考えていない。人は関係の中でしか生きられない。従って何か問題が生じたとき、その原因を個人にだけに帰することはしない。例えば不登校の生徒がでた場合でも、子どもに問題がある、親の育て方が問題だ、先生が原因だ、学校の体制や雰囲気の問題ではないか、いやそもそも教育制度そのもの、社会が悪いのだ、、、というような発想はしない。誰かが、特定の人あるいは事柄が悪い、唯一の原因だということにはしない。おなじ学校でも楽しんで来ている子もいれば、我慢が出来ず、不登校になる子もいる。これは要するにその子と家庭、その子と学校の相性の問題、フィットネスの問題ではないかと考えるのである。だから原因を考えるにも単純な直線的因果関係ではなく、循環的因果関係を想定する。つまり、人と環境の

適合性を重視して問題や状況を理解し、また働きかける場合にもどちらか一方ではなく、可能な限り人と環境（システム）の双方に働きかけることを目指すのである。SVeeが病理や問題の原因を個人に還元していないかどうか、個人だけの責任にしてしまっていないかどうかをチェックしなくてはならない。

④ 治療にのみ焦点を当てないところからも分かるように、病理や欠陥、弱点や欠点を査定により見つけ出し（診断し）、そこに焦点を絞って関わりと言う発想をしない。それだけでなくあるいはそれ以上に、本人の強さとコンピテンス（能力）に着目し、それをその人の不適応、問題からの脱却に、発達・成長のために生かしていくことが大切である。このような考え方と関わりのスタンスが出来ているかどうか、私のSVでは問われることになる。

⑤ 次にチェックされるべき考え方とスタンスは、多様性の尊重ができていないかどうかである。何にでも平均とか標準というものはあるが、病的であろうとあるまいと、問題を抱えていようといまいと、人はそれぞれユニークで個性的な存在である。人はそれぞれ異なっており、それが当たり前であることを自覚することである。人はそれぞれ、あるいは人が作る社会は多様なものであると言う認識を尊重できるよう促す。そうすることでSVeeは、人を平均からのずれ、標準からの逸脱としてのみ「理解」しなくても良くなる。その結果より適切にその人を理解することが出来るようになるであろう。理解できて初めて働きかけることが可能になるはずである。相手のことを理解も出来ていないのに、相手（だけ）を変えようとする無礼な関わりがいかに多いことか。

⑥ コミュニティ心理学が考える望ましいサービスはどんなものか。どんなに長く大変な訓練を受けて修得した知識、技能に基づくサービスであっても、それですべての人に対応できるわけではない。またある問題に対していつでも通用する正しい解決策があるわけでもないと考え。心理的援助活動がサービスである限りユーザーのあらゆるニーズに応えられることが真のサービスであろう。望ましいサービス提供のあり方はたった一つでないいくつもの代替物、代替案、選択肢を提供してそれを当事者であるユーザーに選び取ってもらうことであろう。多様なニーズには多様なサービスが必要である。そのようなニーズに応じて適切なサービスを考え出せることが、極めて大切な能力である。この発想と能力開発を行うことが、SVeeに期待されることである。

⑦ 多様なサービスを、カウンセリングやアセスメントなどという種類ではなく質の面から考えると、治療から、介護・世話、援助・支援そしてエンパワメントまで、幅広い質的にも異なるサービスが存在する。このすべての広がりサービスを準備できることが望ましいのはいうまでもない。ということは心理的援助の専門家は、医学・治療モデル、発達・教育モデル、福祉モデルなどいずれも自らのレパートリーとして持っていたいということである。このような発想と指向性と能力開発の意欲を持っているかどうか確かめられ、指導される。さらに、今特に必要なのは、エンパワメントの重視である。専門家がもっとも良く理解でき、もっとも正しい方針や効果的な解決策を提示すること

が出来ると考えてしまっている思い込みを正し、ある場合には当事者がもっとも良く自分の問題を理解し、もっともふさわしい方法や解決策を考え出し、そのプロセスを体験しながら自ら力をつけていくのだと言う事実を受け入れる必要がある。それが子どもであっても、これがエンパワメントということである。そこに心理の専門家としてどう付き合えるか、貢献できるかが大切な課題になってきている。そういう認識とスタンスを身につけて頂くのも私のSVの特徴である。

以上がスクールカウンセリングの初心者の方を対象としたときに、筆者がおこなうSVでチェックする主なポイントである。

4. より経験のある者に対するスーパービジョン

さて、より経験のある者に対するSVでは、初心者同様にコミュニティ心理学的アプローチで大切にしていることも指摘、確認するが、より実践的なことが指導の中心になるのはいうまでもない。スペースの関係で詳しく紹介することが出来ないので、話題にして指導的に取り上げるテーマのみ以下挙げておく。

① 介入のレベルの吟味：介入をどのレベルに対して行うのが適切かを検討する。個人の再配備のレベルから、個人への介入、集団への介入、システムへの介入、システム間介入、ネットワーク介入までの適否を指導する。

② 介入技法、援助技法の適用：どの技法を中心に行くのか、どういう組み合わせで行くのかなど検討することになる。心理査定、心理療法やカウンセリング、危機介入、コンサルテーション、心理教育、自助グループ、サポートネットワーク&マネジメントなどについて検討指導することになる。これらの各介入技法は、サポートネットワークの中で機能するとき極めて効果的なものとなる。

③ 援助チーム作りの方向とチェックポイント：学校では援助チームを結成して協働が出来るかどうか、スクールカウンセラーが機能しているかどうかの指標にもなる。想定される流れのみここに挙げておくが、これらがSVにおいて検討されるポイントである。

援助チームのスタートは直接の関係者で構成し、SCは必ず入る 2) この子の何が「問題」か？ 誰にとって、なぜ問題なのか？ 3) この生徒にとって必要な「こと」「もの」は何か？ 4) この子が必要としているものを満たしうる、提供しうる援助資源としてどんな「もの、ひと、こと」が周りにある（いる）のか？ 5) 援助チームの確定、新しいメンバー加入の可能性（管理職、外部の専門家、きょうだい、親戚、友人など）6) 援助チームの中で誰が、どの役割を取るか、どんな援助を提供できるか、どの役割が一番ふさわしいかなど吟味する、この中でのSCの役割は 7) 提供できるものは？ カウンセリングの位置づけは？ 必要性は？ 8) 誰がこのチームのマネジメントをするのか？・・・などである。